



# 南極の壺<sup>つぼ</sup>

支援と感謝の詰まった壺、南極へ

日本の南極観測への参加が国際的に認められた 1955 年、戦後の日本を活気づけるのに最適と考えた朝日新聞社は「全社をあげて後援」とし、1 億円の出資とともに広く国民に寄付を募りました。

その結果、全国から集まった寄付は 3,037 万 7,000 円で、現在の価値で 5 億円近くにもものぼりました。

寄付に応じた人々への感謝を示すため、その名を記した 22 冊の名簿を壺に収め、南極へ運ぶことになったのです。

名簿に記されたのは 2 万 1,463 人ですが、団体寄付のほとんどは代表者の氏名のみになっているため、実際に寄付をしたのは数百万人にのぼるともいわれます。

壺は、当時の日展理事、のちに人間国宝となった故・香取正彦<sup>かとりまさひこ</sup>氏が朝日新聞社の依頼で<sup>ちゅうそ</sup>鑄造したものでした。直径 49cm、高さ 40cm、重さ 40kg の青銅製で、側面には

「第三回国際地球観測年南極地域観測を成功させる為  
資金を寄せられた多くの人々の名簿をこの中に収めてあります  
一九五九年十月十五日 朝日新聞社」

という文字が刻まれています。

壺を託された第 2 次隊は悪天候と厳しい海氷にはばまれてしまい、観測船「宗谷」は昭和基地へたどり着けずに越冬を断念します。とても壺を運ぶどころではありませんでした。

翌年、第 3 次隊によって壺は無事に運ばれ、昭和基地の裏山にある天測点（天文測量をするために設けられた基準点）付近に置かれました。



【基地の裏山に置かれた壺の様子】

壺はその後 30 年近く南極の厳しい自然にさらされていましたが、第 27 次隊のとき、壺の隙間から吹き込んだ雪で名簿が凍っているのを隊員が見つけます。

そのため壺は一時日本に持ち帰られ、名簿は低温室で冷凍乾燥されました。この作業には 5 年を要しましたが、その間に国立極地研究所の白石和行前所長の名前が名簿に記されていたことがわかりました。当時小学生だった前所長も寄付をしていたのです。

修復された壺は再び厳重に密封されて 1995 年に第 37 次隊によって南極へ運ばれ、今度は隊長室に置かれました。そして 10 年が過ぎたころ、日本の南極観測 50 周年を迎えるにあたり 上野・国立科学博物館で企画された展覧会のために再び持ち帰られ、壺と名簿が展示されました。

こうして、幾度もの南極旅行を繰り返した壺は現在、名簿をおさめた状態で国立極地研究所に保管されています。



【寄付した人々の名前を記した名簿】



【名簿を収めた壺】